≪博士論文題目≫

中世ドイツ文学盛期における「ミンネの教訓詩」
―　ミンネ概念の形成とその指南　―

LD060011　田 中　一 嘉

≪博士論文要旨≫

「愛・恋愛・性愛」を意味する中高ドイツ語「ミンネ（*minne*）」は、実用語としては現代に継承されていない語であるが、中世を通じて様々な文学ジャンルの作品に多様な形で登場した。ミンネは中世ドイツ文学の中心的主題であったと言っても過言ではないだろう。12 世紀末から 13 世紀中葉にかけて最盛期を迎えたドイツ宮廷文学は、中世ラテン文学と並んで約 1 世紀進んだフランス宮廷文学の影響を多大に受けていた。この時代に謡われたミンネ概念は、いわゆる「宮廷風恋愛（*amour courtois*）」との密接な関連性が窺えるが、中世ドイツの詩人たちは、形式・主題の両面でそれまで培われてきた文学的伝統を基礎として、ドイツ語圏独自のミンネ観を彼らの詩作に織り込んでいったのである。その際、「高きミンネ（*hôhe minne*）」や「低きミンネ（*nideriu minne*）」といった多様なミンネが謡われたが、これは、詩人たちが「ミンネとは何か」を問い続けた末に至ったひとつの帰結であると同時に、次の世代の詩人たちが「ミンネとは何か」を新たに問うための豊かな土壌ともなっている。この問いと答えという連関の中で、中世盛期の詩人たちは「ミンネとは何か」を問い、それに答えるためのひとつの定まった形式と内容を準備したのではないか、そして「ミンネとは何か」を問い続けた詩人たちの試行錯誤の結果として「ミンネの教訓詩（Minnelehre[-gedichte]）」という文学ジャンルが中世盛期に成立していたであろうという仮説から本稿は出発している。本稿では、ミンネの教訓詩という文学ジャンルが中世盛期の文学的伝統と（受容者の）需要との関連性においてどのように形成されていったのかを、共時的かつ通時的連関を考慮して考察している。

そこで第 1 部第 1 章ではまず、ミンネの教訓詩の同時代的な構造的モデルとして、アンドレアス・カペルラヌスの‘*De amore*’に着目している。‘*De amore*’の「小冊子（*libellus*; *tractatus*）」という形式的特徴は、討論形式、アレゴリー、本歌取りなど様々な叙述パターンが組み合わさったものであり、アモールを論理的に説明し、それを教えとして効果的に受容者に伝達するという機能を有している。この形式的特徴に鑑みて、第 2 章ではドイツ語圏の諸作品について再考察している。本稿でミンネの教訓詩に属する作品として考察の対象としている諸作品は、これまでの文学史の記述において（中世後期に成立したとされる）「ミンネの弁論詩（Minnerede）」という文学ジャンルにとっての「先駆的作品群」として補足的に扱われてきたか、あるいは単に中世盛期における「教示的作品群」として文学史の中で傍らへ置かれていた作品である。これらの諸作品を個別的に、作品の韻律構造、叙述形式、内容的統一性などの観点から分析することによって、ハルトマン・フォン・アウエの『哀歌（*Klage*）』（1180 年頃）、デア・シュトリッカーの『婦人の名誉（*Frauenehre*）』（1230 年頃）、ウルリヒ・フォン・リヒテンシュタインの『婦人の書（*Frauenbuch*）』（1257 年頃）の三つをミンネの教訓詩の主要テクストとして挙げることができる。これらの作品

は共に、ミンネを論理的に説明しようとする意図とそれを教示的に受容者に教えるという使命によって内容的な一貫性を伴って詩作されている。そして、ミンネの教訓詩の形式的特徴としての「小冊子（*büechelîn*）」という形式の内には、例えば『哀歌』のような内省的な「肉体」と「心」のアレゴリー的な討論形式および『婦人の書』における男女の討論、そして、とりわけ『哀歌』と『婦人の名誉』に特徴的なアレゴリー表現といった叙述形式が織り交ぜられている。このような修辞的技法はミンネという抽象的な現象を具体的かつ論理的に理解可能な仕方で説明するのに非常に効果的であると言える。

この三作品には、形式的特徴の共通性に加え、語られているものの共通性も見られる。本稿第 2 部では、ミンネの教訓詩の内容的な統一性がどのようなものであるかを論じている。ミンネの教訓詩におけるミンネ概念を整理すると、個々の作品間に生ずる成立年代の隔たりにもかかわらず、これらの作品はほぼ同じ理念を踏襲していることがわかる。それは「ご婦人（*vrouwe*）」に対する「奉仕（*dienst*）」の理念である。ミンネ概念の中核に位置するこの特徴は、中世盛期の様々な文学作品に描かれたミンネ観ともかなりの部分で共通しているものである。この点に関して、まず第 2 部第 1 章では「奉仕」概念を中心に考察している。ミンネの教訓詩に描かれているミンネは、個人的な交際の枠に留まるものではない。奉仕者は、彼が属する共同体の肯定的価値観としての「美徳（*tugent*）」を体得・履行するための「労苦（*arbeit*）」に勤しむことによって共同体から「名誉（*êre*）」を授かる、すなわち「騎士（*ritter*）」という称号が与えられる。そして、この奉仕という理念自体が共同体秩序を維持していく機能を有しているのであり、ミンネは一種の社会的規範のレヴェルにまで高められているのである。

続く第 2 章では、奉仕の対象である「ご婦人」をミンネの教訓詩がどのように描いているかについて考察している。ミンネの教訓詩において「ご婦人」は、「名誉の導き手」であり、この世の「喜び」をもたらす存在として絶対的地位が与えられている。ただし、奉仕における「ご婦人」の絶対化は無条件的なものではなく、「騎士」の場合同様、共同体の承認を必要としている。奉仕者は「騎士」としての徳目を備えて初めて共同体に肯定的に受け入れられる。同様に「ご婦人」という女性に対する形容もまた、単に社会的地位の高い女性を表すものではなく、「女性らしい（*wîplich*）」諸価値観を満たした女性に対してある種の称号として付与されたものである。

第 2 章第 2 節では、女性の美と性とが結び付けられて、ミンネの官能性を表している点に着目している。ミンネは共同体秩序において最高に価値あるものとされると同時に、ひとつ間違えば共同体秩序を崩壊させかねない力をも有している。それこそがミンネの官能性（の悪しき一面・性的放埒）であるが、しかし、中世の詩人たちはそのような〈危険な力〉をコントロールする術を受容者に説くことで、ミンネを（受容者の）共同体の道徳的秩序を保持させるための原理として肯定的な意味において理念化しているのである。この点に関連して第 3 章で、ミンネと結婚の関連性について考察している。「宮廷風恋愛」という形式が姦通を暗示しているように、ミンネと結婚が相容れるか否か、という問題が生じるが、ミンネの教訓詩、とりわけウルリヒの『婦人の書』では結婚がミンネの「場」として機能すること、ミンネが社会制度としての結婚と調和していることが説かれている。

第 3 章では第 1 章と第 2 章で言及した論述の骨格、換言すれば、ミンネの教訓詩の内容

的構造についてをミンネの教訓詩の批判的描写と受容者との関連性（第 1 節・第 2 節）、および作品の教示的意義の観点から分析している（第 3 節）。ミンネの教訓詩は、ただ単にミンネの素晴らしさについてを語っているだけではない。ミンネの教訓詩では、批判的描写の占める割合が少なくない。ミンネの教訓詩における〈批判〉という叙述形式は、受容者の生きる世界とも密接に関連し、〈作者－作品－受容者〉という受容連関をより強く映し出している。文学における世相批判は、その作品が成立した時代についての共通認識が作者（作品）と受容者との間に築かれていなければ意味を持たない。このことから、作品の受容者の射程は宮廷に生きる人々であり、ミンネの教訓詩に描かれているミンネの理念、奉仕の理念は、宮廷社会（の人々）を前提としているのである。また、ミンネの教訓詩の〈批判書〉という特徴は、その内容が受容者にとっての差し迫った問題として提起されていることを意味している。ミンネの教訓詩は受容者の「期待の地平」を呼び起こし、その都度受容者とミンネの関係を変化、拡張、修正しているのである。

このような批判的描写は、受容者の誤った価値観を修正し、教養を高める、あるいは新たな（肯定的な）価値観を芽生えさせる効果がある。その上でミンネの教訓詩は、ミンネを「教示できるもの、習得できるもの」として概念化し、受容者に向けて「どう在るべきか」についての教えを説いている。ミンネは、その官能性が示すように、肯定的な意味においても否定的な意味においても社会を変革するだけの力を有するが故に、その力を正しく認識し、実践することを人々に示すための〈指南書〉が必要であったのである。

最後に第 4 節では、個々の作品に描かれている理想郷の分析を行っている。理想郷はある種の虚構ではあるが、ミンネの教訓詩に描かれているのは手の届かない空想の世界なのではなく、そこにかかれている〈教え〉によって（受容者が）実現可能な世界観である。ミンネの教訓詩は、批判的な描写を伴いつつ、そして理想的な世界観を呈示することによって、共同体秩序における〈理想的なミンネ〉を構想している。ミンネの教訓詩では〈危険な力〉を〈理想的なもの〉へと導く方策が説かれているのであり、そこにこそミンネの教訓詩の教訓詩たる意義が存在しているのである。

このようにミンネの教訓詩は、現実世界のあらゆる場面において宮廷社会と恋人たちが共存できる（調和した）〈理想のミンネ〉を論理的に呈示し、そしてその実現を可能ならしめるための〈指南書〉の役目を負っている。ミンネを抒情的にでも、物語という形式でもなく、〈理論書〉かつ〈指南書〉という形式で著したところにミンネの教訓詩の特異性と独自性がある。「ミンネとは何か」という問いと答えの循環の内で、ミンネの教訓詩という文学ジャンルが生まれ、ミンネの教訓詩が社会批判や理想郷の描写を伴って〈教え〉として受容者に示されていることは、ミンネが中世の文学作品の内でのみ完結した限定的あるいは閉鎖的な現象であったわけではなく、むしろミンネは〈作者－作品－受容者〉の属する共同体秩序と密接に結びついていること、それ故に文学作品が世の中を動かす力を有していることを如実に示しているのである。